

ところで、結句をどう読むのか。「わらひは」では四拍で字足らずになる。七拍で読むとしたら、旧仮名で書けば「かつこわらひは」となる。そう読むのだろう。

国分寺の湧水のみな透き通り絶えず流れて淀まぬは  
良し 栗原道子

水をうたった今月の作、アフオリズムないしは教訓的な方向にながれがちなどころを、かろうじて踏みとどまって、水そのもののイメージの歌となっているところが見どころ。くもの張る糸は見えねどえごのきの枝より枝へひかりは走る 松橋雅実

じつさいの心の動きは、歌と逆の順序なのだ。つまり、何か光る筋のようなものが見えたので、しばらくのあいだ「？」の状態がつづき、やがて、あつ見えないけれどあそこに蜘蛛の糸があるんだ、と了解したわけだ。いったんこころの動きを整理して組み立てた表現だからこそ端正さを読み取りたい。

葡萄園の真闇の中にひと筋の月光射せる古井戸がある 桐谷文字

葡萄園の中の古井戸という神秘めいた取材がポイントである。夜の葡萄園には独特の暗さが広がっているのだろう。さらに、その一角にある古井戸の奥のより深い闇。その闇に月光がささるのだ。この一首には、音に關する表現がまったくないが、読者は深い深い静寂を味わうべきなのだろう。

目が掬う薄きみどりの柔らかさ草から零れる小さき  
かまきり 三宅徹夫

孵化してまもないかまきりであろう。ネットで見ると、一応カマキリっぽいかたちはしているが、ほんとうに小さく、ほとんど透きとおっている。楊枝の四分の一ぐらいの長さ、楊枝の八分の一位の細さといえ、分かってもらえるだろうか。「薄きみどりの柔らかさ」はそんな子カマキリの表現である。

友という船に乗り合う六十歳エンジンぼろぼろ手こぎの木船 川又和志

「選歌ルーム」の伊藤一彦の評に「同窓会でもあったのだろうか」とあった。私も同窓会の歌だろうと読んだ。子どもころ、或いは若いころの仲間たちが、ともに選歴を迎えての感慨である。現在の六十歳はまだ若い。働きざかりと言っている。だから、逆に、下句がユーモアになっていると見ていいだろう。

その国の時代の力友と聴くチャイコフスキー交響曲 沢田昌子

チャイコフスキーは一八四〇年にロシアのウラル地方に生まれ、一八九三年に五十三歳で死去している。曲だけではなくその背景、その時代をまるごとを愛している様子が伝わってくる。

海までの松の林の風に入り網茸、松露の香を尋ねゆく 加賀谷実

キノコ狩りである。海風の強い中、松林の一角だけが強風をまぬがれているのだ。「網茸」「松露」という固有名詞が、茸好きならではの作であることを示している。